

記録することの可能性：震災と建築史（3）

2011年10月20日（木）13:00～17:00

東京大学生産技術研究所 食堂棟2階R 5

講義・写真発表（浅川敏氏）

「大槌復興過程記録プロジェクト」報告（岡村）

講義「建築を残す～記録することと記憶すること」（足立裕司先生）

浅川敏氏：講義・写真発表

記録することの意味：

写真は2つの役割、「記録する」「写真を使って何かを表現する」、がある。

記録することの意味は主体によって異なる。



浅川敏氏

震災後の撮影について：

震災後何かしなくてはいけないと思ったが、何をすれば良いか分からなかった。阪神の時は興味本位で写真を撮ることが失礼だと思い近づけなかった。今回は東京も揺れて少なからず影響を受けたこともあり、すごく身近に感じた。

地震後、最初の写真を千葉で撮影。地震が起きる前と変わらないように撮影した。5月に女川から釜石、6月に大槌、6月末に南三陸、8月に矢吹町、9月に南三陸を撮影した。どういうカメラを持っていくか迷った。迷った結果三台のカメラを持って行った。都市を撮る為の大型カメラにモノクロのフィルム、一眼レフ、そして多くの写真を流されてしまったらう被災した方に写真をプレゼントしようと思いチェック。しかしその場に人々は多くはいなかったし、またそれらの人々にレンズを向けることはできなかった。

誰に向けて、いつに向けて記録しているのか：

被災地で撮影する際、誰に向けて、いつに向けて、記録しているのかを考えた。

今までは自分のため。撮った写真を人が見て感動してくれる短期完結型。写真＝記録が、その先どの時代まで活用されるのか改めて考えた。そしてそれはずっと先に向かうべきだと考えた。未来に情報を残すために、写真を保管・預けることにした。保管・預けられた写真が何かに利用され、次の人へ引き継がれていくことが重要だと思う。

被災地のイベントで、写真を撮影してそれをあげる写真屋さんになった。若い人は携帯電話の写真が残っていたり、これからも写真が撮れるため、高齢の人の方が写真を欲しがった。自分の思い出を残すという写真の原点について考えた。

質疑

近藤 現場で何を撮ろうとしているのか？

浅川 地震ではなくて、東京の町と同じように撮ろうとしている。

- 近藤 大槌町と南三陸で何が違ったのか？
 浅川 津波が来てしまった町の景色と考えれば、場所によっての違いはなかった。
- 国枝 写真を見ていると東京では撮らないようなものが写っていたが、そういうものも東京都同じように特に意識をせず撮影しているのか？
 浅川 本当にまったく同じといったら嘘。
- 岡村 いつもは客観的に写真を撮影していると思いますが、今回被災地を撮影して、感情移入してしまったことはあったか？
 浅川 ないと思う。悲惨なものを取りに行くことだけはしたくなかった。報道写真的な写真は、そういうものを撮る人が撮ればいい。
- 村松 主観的なような気がする。食べ方が人それぞれ違うように、写真も違う。客観的に撮っているようで自分の中の Discipline みたいなものがでている気がする。
- 足立 今見せられたのは津波の痕跡でもなく、津波が終わり、廃材が処理された佇まいだと思う。悲惨さや生々しさや、復興が始まった状況ではなくて、原点のところを記録されているような気がした。将来それを見ると、前にあった風景とこれから起こる風景の断絶を見ることが出来る。
- 浅川 この世の終末を撮りたいわけではなかった。これから新しい都市ができる始まりを撮っている。

岡村：「東日本大震災の記録とその活用」報告

1. 大槌町の概要

地理、統計、歴史、今回の津波被害

2. これまでの活動

第一回調査

期間:6月7日~6月13日

体制:東大村松研、京都精華大学学生等総勢 26 名

内容:大槌(おもかげ)プロジェクト

散逸した写真等個人の思い出の収集 警察、社協へ届け出
 悉皆調査により被災後 3 か月のまちを記録



村松研博士 岡村健太郎

第二回調査

期間:9月24日~9月28日

体制:東大村松研、地球研 計 9 名

内容:

震災後 6 か月のまちの記録:建物残存状況調査、定点観測、映像による記録

レジリエンス調査:被災の歴史の中で培ってきたレジリエンスを発掘・検証し、将来に向けて継承する

3. 12月調査について

3つの調査案についての説明。次週(10月27日(木))、12月の調査について話し合う。

調査案 悉皆調査:過去二回の調査の継続

調査案 詳細調査:地形と住まい方、現在のまちの様子を断面図として記録することで、地形と住居の関係性の重要性を理解する。堤防や防波堤ができる以前の断面図を作成することで、今後の復興にも有効な過去のまちが持つ津波への対応力(レジリエンス)を抽出する。

調査案 新規活動:こどもとまちを記録する

4. 確認事項

参加日程の確認、今後のスケジュール

足立先生講義：「建築を残す～記録することと記憶すること～」

なぜ、残すことにこだわるのか？：

記憶をモノに頼りながら残す必要があると思い、残す活動を続けている阪神大震災の記憶を残す語り部のように、人と人との関係で記憶を残していくことには限界があると思う。「ここに家を建てるな」という津波碑みたいなモノをもう少しリアルな形で残したい。



足立裕司先生

モノと記憶の持続、リセットすることはよいのか？：

建築において空間のデザインは重要だが、時間をデザインすることをもっと考えた方がよい。記録・記憶することは目的を持った行為で、それから歴史が紡ぎだされている。過去と歴史は違う。歴史は単なる過去を見ているわけではない。

建築と人間の関係を考えるときに、モノと記憶の関係が必要だと考えるベルグソンの哲学は重要だと思う。

本来目の前にあるはずのモノが理不尽に消えてしまうと、人間は不安定な精神状態になる。阪神大震災や東日本大震災では、記憶が宿っていた風景や環境が消えてしまった。そんな時、どうすればよいのか？リセットして始めることができればよいが、皆ができることではない。地域住民・行政が決めた方針であれば何でもよいのかという疑問が残る。

阪神大震災後の各地の被害とその後の状況

阪神大震災の各地の被害、歴史的建造物の状況について記載。

歴史的建造物のうち、重要文化財等に指定されていない未指定の歴史遺産が問題。指定されている歴史遺産は焼失しない限り建て直される。

修復の技術は重要。リフォームしたのにも関わらず、構造のことを考えていなかったため、崩れてしまった歴史的建造物もある。

制度が同じでも、考え方によって町並みが変わってくる。地元意識の強い根雨は公費を古い建物の修理費に充てた。一方、黒坂は、まとめ役がいなかったのか、公費で古い建物の取り壊しを行った。

全部リセットしてしまうことがよいのか？

歴史的なことを無視して行われる土木事業が何を引き起こしていくかを尼崎市の築地地区の事例を用いて紹介。

尼崎市では、0メートル地帯の解消を目的とした地面のかさ上げが行われた。道路の幅を規格にあわせてため、地区内の古い建物がなくなってしまった。同時に道路の縁石等、何気ない環境が激減した。

何ができることか

阪神の経験を受けて、調査票を作成。裏方として活動。

神戸大学の同僚の先生は、元の町の模型から新たな町を考える取組みを気仙沼で行っている。このドタバタで原点を忘れて、土木的な方法論で計画してしまうのは危険性がある。街づくりの中に、どうすれば生きてきたことの証明を入れることができるのかを考えて欲しい。

質疑

- ドン 震災により、一般住民の歴史的建造物の保存に対する考え方は変わったか？
- 足立 アンケートの結果をみると、お年寄りを中心に歴史的建造物を残したいという人もいた。一方、お年寄りの中には、残したいけど、条件として息子・娘の判断を優先するという人もいた。建造物の歴史に価値を置く地域と、そうでない地域では、住民の考え方が異なる。
- 村松 私は古いから残したいとは思っていない。この考え方は震災前後で変わっていない。今の人の設計の方が昔の人よりも上手い可能性がある。下手な人がつくった建物を残していくのは、人類の進歩を考えると、よくない。それよりもなぜ津波で街が壊れてしまったのか、その上でどうすれば土地・環境を含め元々あった良いものを引き出せるかを考えたい。
- 足立 北陸をまわってみて、街を新しく造り直すよりも、現状を上手く維持して造り直していった方がよいのではないかと思った街が多かった。今回のように津波で全部なくなったところをどうするかは、これまで考えてこなかった。
- 人のつながりがあれば街は造り直せると思う。阪神大震災からの復興の際に起こった問題は、全体としてのつながりがなかったこと。個としての要求を満たすことだけが考えられ、街としてはばらばらになってしまった。
- 古いモノがなんでもかんでもいいのではない。古いモノを上手く使える技術を考えることが重要。
- 葛西 今回の地震・津波と阪神の地震は違うが、阪神での経験で今いかされたことは何か？
- 足立 調査事項や今何をしないといけないかは阪神での経験が生かされている。また、神戸では仮設住宅を距離が離れたところに建ててしまい、震災前の関係が失われ、孤独死が発生した。その教訓を活かし、東北では地域的なまとまりを維持しながら仮設住宅に移ることで、孤独死などへの対策が行われた。
- 阪神の教訓でマイナスになったものもある。阪神では仮設住宅の畳の処分が困った。そのため、東北では仮設住宅に畳を導入しないことにした。しかし、寒いので畳を敷くことになった。畳を敷くと扉が開かなくなる。また、震度の基準が阪神大震災後変更されたのにも拘わらず、文化庁は、当時の基準と同じだと考えて調査範囲を決めてしまった。そのため、ほとんど壊れていない膨大な範囲を調査することになってしまい、2次調査への移行が遅れた。
- 建築の分野では、神戸の経験は活かされていない。津波の被害と地震の被害は違う。津波の場合は、零になってしまう。
- 山田町のように少しでも何か残っている場合は、それを上手く利用することで、記憶をとどめることが出来るのではないかと考えている。神戸では公費で撤去費が賄われた。しかし、それを修復費に充てることは出来なかった。今回撤去費を修復費に充てることを認めてもよかったのではないか。
- 田口 阪神と東日本よりも、戦災と東日本の方が感覚的には近いと思う。ある程度断絶が起こったものをどう回復させるのか。
- 村松 断絶が起こったものの回復方法を3つ考えている。一つ目は、前のイメージを皆で共有する。二つ目は、残っているものを利用する。三つ目は、全く新しいものをつくる。しかし、全く新しいものとなると、前のつながりが切れてしまう。それをつながりの強い地域で出来るかどうか分からない。
- 戦災との違いは、地域としてのまとまりが強いこと。被害を受けた場所が都市か地域かが戦災と東日本の違いだと思う。
- 人のつながりに期待したい。神社がきれいに掃除してあるところ、祭りが維持されているところ、は元に戻るのではないかとこのことを期待させられる。地域を維持してきたという部分が違う
- 岡村 震災前は全く関係のなかった者、外部の者が被災地域の復興に対して提言することはどうなのか？
- 足立 正論であれば言ってもよいと思う。私は阪神大震災の復興に関して、行政の人と話すことをやめてしまった。話しあおうとする度に、門前払いされたりして、非常にいやな思いをした。自分が傷つきたくなかったのか、委員としてあまり口を出すのは良くないと思ったのか、言うのをやめてしまった。今から言えば、もっと言ってあげればよかったと思う。
- 村松 正論というのは、非常に難しい。例えば、防潮堤の高さに関して提言する場合、それで責任を持てます

かと言われるとたえられない。

足立 防潮堤以外の対案が出てくるのではないか。例えば、防潮堤を低くするかわりに浮いたお金を保険等、何か他のものに充てることでより有効に使えるのではないかと思う。

文責：岸 俊介